

アメリカのマネー・センター・バンクによる金利スワップ取引 - 大投資銀行との比較 -

掛下 達郎（松山大学）

デリバティブでは、1997年のノーベル賞を受賞した Myron S. Scholes と Robert C. Merton に代表されるプライシングの研究が中心である。本報告はアメリカ合州国のマネー・センター・バンクによる金利スワップ取引の構造を扱っており、商業銀行の業務展開という視角からの分析である。

すでに掛下（2005）では、金利デリバティブ取引の現状を把握することで、現在の銀行業務を考察してみた。とくに、国債の先物取引に始まる金利デリバティブ取引を歴史的に考察した。そのなかで、マネー・センター・バンクと大投資銀行の金利デリバティブ取引の特徴を追跡し、商業銀行のデリバティブ取引が投資銀行のものどう異なっているかを把握してみた。

掛下（2005）に引き続き、本報告ではデリバティブの一つ、金利スワップ取引に焦点を当てている。本報告のおもなファクト・ファインディングは、金利スワップ取引において、マネー・センター・バンクはおもに変動金利商品を作り出し、大投資銀行はおもに固定金利商品を作り出していることである。これは商業銀行業務と投資銀行業務の違いから生じており、同じ金利スワップ取引といってもマネー・センター・バンクと大投資銀行は異なったかたちで市場に参加しているのである。これは、単に個々のマネー・センター・バンクや大投資銀行が自行の金利リスクを回避するために金利スワップを作り出しているだけではなく、今まで説明されなかった現象ではないだろうか。世界的にみても、金利スワップ取引で変動金利商品を作り出すことができるのは、アメリカのマネー・センター・バンクが中心である。金利スワップのディーリングでも、マネー・センター・バンクの重要性は揺るがない。このように考えると、国際的な業務に長けた大投資銀行からマネー・センター・バンクに金利スワップ取引の中心が移っていることも説明できるだろう。

キーワード：金利スワップ，マネー・センター・バンク，投資銀行

掛下達郎（2005）、「金利デリバティブ取引の歴史的展開：アメリカのマネー・センター・バンクを中心に」，日本金融学会春季大会（於日本大学），5月。